『初心仮名遣』の示す仮名遣いについて

――活用語尾を中心に――

久保田　篤

一

元禄四年刊の『初心仮名遣』は、序文に「上に書処は自他共に日比誤来れる書ざまなり其中に記は其正儀也其下に記は其正字をあらはす也」とあり、また最初の天地門の初めに「傍（カタハラ）ニ丸ヲ付ルハ誤（アヤマリ）ノ字也」（一オ）とあるように、上に誤りとする仮名遣い、その下に正しい仮名遣い（更にその下に漢字表記）を示し、上段の誤りの仮名には丸印を付けるという、特色のある形式を有する点が知られており、注目すべき記述が見られることもあって、取り上げられることの比較的多い仮名遣書である。[1] しかし、示されている仮名遣い自体の考察はあまり行われていないようである。当時の仮名遣書の代表的なものとしてしばしば言及されるものでもあり、本書の示す仮名遣いを検討する必要があると感じる。

序文の「引用ゆる所二人丸秘抄の仮名遣于世定家仮名遣といふありこれを初めとして先達の古書によりてまじへ集めて記す者なり」という記述から、本書が正しいとする仮名遣いの基本は定家仮名遣いであることは明らかである。しかし、「引用ゆる所二人丸秘抄」とあるにもかかわらず『仮名文字遣』とは異なる仮名遣いを掲げる場合もある。例えば、『仮名文字遣』慶長板本には、「お」のところに「あおな　蔓　菁蕪」があるが、『初心仮名遣』では、

あほな	あをな	蔓菁　（四四ウ）
あおな	あをな	蕪菁　（四六ウ）

とあって、「あをな」を正しいとしている。これは、他の「アオ～」という語が、

あほうなばら	あをうなばら	滄溟	（一ウ）
あほのり	あをのり	陟釐	（四四ウ）
あほやき	あをやき	青柳	（四七ウ）
あほさき	あをさき	鵁鶄	（五六ウ）
あほばと	あをはと	青鳩	（五八オ）
あほさば	あをさば	鯖鱄	（五九ウ）

であって、全て「あを～」が正しい仮名遣いであるため、これらとの統一性を考慮したものと考えられる。これらについて『仮名文字遣』慶長板本は、「を」に「あをうなばら　滄溟」「あをのり（あおのり）　（とも）」「あをやぎ　青柳」「あをさば　鯖」があるが、「お」の

「あおのり　陟釐青苔」もある（「あをさぎ」「あをばと」は記載なし）。『仮名文字遣』慶長板本にはこの他の「アオ～」として、「を」の「あをかつら　防己」「あをつゝら　青累　藁葛」「あをによしなら　青丹吉平」「あを馬のせちゑ」と、「お」の「あおと　青礪」「あおはの山　青羽山」がある。以上のように「アオ～」は「あを」が多いが「あお」もある。これを『初心仮名遣』では、「あを～」に統一しようとしている点が窺われる。ただし形容詞「青し」については、

あほし　　あおしをトモ　　青　碧二人丸ー（九九ウ）

になっていて、「二人丸ー」と出典を示す通り、『仮名文字遣』慶長板本の「あおし　青　碧　滄」と同じ仮名遣いである。

また、（既に何度か取り上げてきた語であるため今回また持ち出すのもどうかと思いつつ、それだけ特徴的なものとも言える）「家」の仮名遣いは、家屋門の最初に

いゑ　　いへゑ同　　家宅舎屋室　（五ウ）

と示される。関連する語として鳥類門に「家鳩」もあり、

いゑばと　　いへいゑ共　　右同　（五六ウ）

（この右に「とうのはと　たうのはと　鴿」がある）

と記す。このように、「ゑ」を上で誤りとして否定して、下に正しい「へ」を示しながらも、結局「ゑ」も認めるという、奇妙な記述になっている。この「家」の仮名遣いは、定家仮名遣いも古用の表記と同じ「いへ」であるが、これとは異なる「いゑ」と書かれることが江戸時代前期には少なからずあり、この「いゑ」を掲げる仮名遣い書もこの時期には幾つかあること等をこれまで示してきた。[2] この点を考慮すれば、『初心仮名遣』の以上のような記述は、当時の実態や考え方に配慮を行った結果かと推測される。

このように、『初心仮名遣』には、定家仮名遣いに概ね従いながらも、統一的ではないと感じてしまったかと思われる部分の是正や、当時の実態に対する配慮などを行いながら、正しいとする仮名遣いを記すという特徴が窺われる。ところで、この『初心仮名遣』においては、『仮名文字遣』のほかにもう一書、『一歩』（延宝四年刊）の引用も見られる。『初心仮名遣』の殆どは、右にも述べたように、上段に誤り、中段に正しい仮名遣い、下段に漢字表記を記すという中心部分から成っているが、この前にまず法則等を述べる部分[3]が四丁ほどあり、また中心部分の後にも、「二人丸秘抄　両用假名之分」「同抄誤之分」や、他の仮名遣書にもしばしば見られる『悦目抄』を引く部分など、説明等を記した部分がある。そのうち、「同抄誤之分」と記した部分は、最初に「先人ノ作書ニ号ニ假名遣一歩抄一者アリ是益アル書也」（一一〇オ）と記し、『一歩』下巻の記述を引きながら、『仮名文字遣』の「誤」を指摘するものとなっている。[4] 『一歩』下巻は主として活用語尾の仮名遣いについて述べた書として知られているが、『仮名文字遣』の誤りの指摘から始まる書である。これを「益アル書」とすることは、「これを初めとして」と述べて『仮名文字遣』を最重要視することと矛盾する部分が生じそうである。このような点を考慮して、『初心仮名遣』の示す仮名遣いの検討の手始めに、『一歩』が対象の中心としている、活用語尾の

仮名遣いをまず見ることにしたい。（『初心仮名遣』には、四つ仮名やオ段長音の開合に関わる語も非常に多く掲げられているが、既に区別は失われていたかと考えられるものの、『仮名文字遣』が取り上げているような以前からの仮名遣いの問題の部分と同じ扱いをするには難しい面があると考え、今回は考察の対象から除外した。[5]）

二

最初に、最も多くの語が示されている、ハ行四段活用動詞（以下、活用の行を示す場合は、元々の行）活用語尾の仮名遣いを見るが、『初心仮名遣』では、主として言語門のところに、

ともなう。	ともなふ	引唱	（七〇ウ）
ともない。	ともなひ	同	（同）
かたらう。	かたらふ	話　語	（七八ウ）
かたらい。	かたらひ	同	（同）
ゆう物ヲク、ル也	ゆふ	結　縛	（一〇二ウ）
ゆいて同	ゆひて	同	（同）
みゝにさかう。	みゝにさかふ	逆耳	（一〇二ウ）
耳にさかい。	耳にさかひ	同	（同）
したう。	したふ	慕	（一〇三ウ）
したい。	したひ	同	（同）
つがい。	つがひ	番　結番	（八三ウ）
つかふ	つがふ	同	（八四オ）（〇なし）
ねかい。	ねかひ	願	（八四ウ）
ねがう。	ねがふ	同	（同）
うかゞい。	うかゞひ	窺	（八七ウ）
うかごふ	うかゞふ	同	（同）
うたがい。	うたがふ	疑	（八七ウ）
うたごふ	うたがふ	同	（同）
うらない。	うらなひ	ト　筮　占　并同	（八七ウ）
うらなう。	うらなふ	同	（同）

などのように、動詞終止形の表記の次に、連用形や、連用形の名詞化したもの、またその複合語等を合わせて示すことが多い。逆に、などのように、連用形の名詞化したものが先に示され、次に終止形を記すという場合もある。仮名遣いを検討する際は多くそうであるが、右のような点からも、以下、動詞連用形が名詞化してできた語であることが明らかなものの末尾の表記についても、活用語尾の仮名遣いとして扱う。

右に示したように、『初心仮名遣』では、終止形と連用形（及び

その名詞化したもの）とを並べて掲載することが多いが、終止形のみが挙げられることもある（連体形は1例、連体修飾の例があった。以下の最初に示す例）。一方連用形のみという場合はないが、その名詞化したものや更にその複合語はもちろん単独で掲げられることがある。右に取り上げた以外のハ行四段動詞の例を、やや多めに示してみる。

いざようなみ	いざよふなみ	徘徊浪	（一ウ）
いこう	いこふ	休息（ヤスム也）	（六四ウ）
いさかう	いさかふ	鬪諍	（六四ウ）
いう物をくゝり結也	いふゆふ同	結縛	（六五オ）
いとう	いとふいとひ共	厭	（六五オ）
いぼう	いばふいはゆる共	嘶馬	（六五オ）
はらいほこり	はらひ	拂掃	（六七ウ）
はらう	はらふ	同	（同）
はせむこふ	はせむかふ	馳向	（六七ウ）
はせむかい	はせむかひ	同上	（同）
はすちがう	はずちがふ	筈弛	（六七ウ）
はずちがい	はずちがひ	同	（六八オ）
はずにおう	はずにあふ	筈合	（六八オ）
におう	にほふ	匂薫（同）	（六八オ）
におい	にほひ	同	（同）
になう荷を	になふ	荷擔同	（六八オ）
にない	になひ	同	（同）
にぎわい	にぎはひ	賑	（六八オ）
にぎおう	にぎはふ	同	（同）
へつろう	へつらふ	諛	（六九オ）
へつらう	へつらふ	諂	（同）
へつらい	へつらひ	同	（同）
とりつくらう	とりつくろふ	取繕	（七〇オ）
とりつくろいて	とりつくろひて	同	（七〇オ）
とらうとる也	とらふ	捕擒同	（同）

ちかい。	ちかひ	誓	（七〇ウ）	
ぬぐう。	ぬぐふ	拭	（七一ウ）	
わらう。	わらふ	笑	（七七オ）	
わらい。くさ	わらひぐさ	咲種	（同）	
かう。うり	かふ	買	（七九オ）	
かい。うり	かひ	同	（同）	
かみゆう。	かみゆふ	髪結	（七九オ）	
かみゆい。	かみゆひ	同	（同）	
かこう。	かこふ	圍	（七九ウ）	
うるおう。	うるほふ	潤		
うるおひ。	うるほひ	混		
		濡	并同	（八七オ）
		同	（同）	
うしない。	うしなひ	失	（八八オ）	
うしなう。	うしなふ	同	（八八ウ）	
まかない。	まかなひ	賂	（九二オ）	
まかなう。	まかなふ	同	（同）	

まごう。	まがふ	紛		
まがいて	まがひ	同	續同	（九二オ）
		同		（九二ウ）
まとう。	まとふ	纏ノ糸轉ノ葛蜿ノ虵		（九三オ）
まとい。	まとひ	同		（同）
ふでをつかう。	ふでをつかふ	筆使		（九五ウ）
ふでつかい。ふみづかい	ふでつかひふみつかひ	同	文使	（同）
こいねがう。	こひねがふ	庶幾	冀　希并同	（九六オ）
あらう。物ヲ	あらふ	洗	浣	（九九オ）
あらい	あらひ	同		（同）
あてがう。	あてかふ	擬	一作同	（一〇〇オ）
あてがい。	あてがひ	同		（同）
さかう。人ニ耳ニ	さかふ	逆	忤	（一〇〇ウ）
さかいて	さかひて	同		（同）
さまよう。	さまよふ	吟伶	憂吟同日本紀	（一〇一オ）
さまよい	さまよひ	同		（同）

きそう。キアヲラフソ也ウ也　きそふ　競　（一〇一ウ）
きそい。　きそひ　同　（同）
きおう。　きおふ　同　（一〇二オ）
きおい。　きおひ　同　（同）

もらう。　もらふ　囉齋　貰同　（一〇五ウ）
もらい。　もらひ　同　（同）

ものいう。　ものいふ　言　謁　言語同　（一〇六オ）

ものならう。　物ならふ　学問日本紀　（一〇六オ）
ものならい　物ならひ　同　物習　（同）

せめたゝかう。　せめたゝかふ　攻戦　（一〇六ウ）

すじかう。　すぢかふ　折違　直違　（一〇六ウ）
すしかい。　すぢかひ　同　（同）

すくう。　すくふ　巣木　窠穴　共和名（一〇七オ）
すくい。　すくひ　同　（同）

これまで挙げた以外の四段動詞ハ行表記の語で、まず、終止形のみが記されたもの、終止形が先に掲出されその左に連用形やその名詞化等の並ぶもの、また終止形の下に小書きの連用形（名詞化）を示すものを、出現順に列挙しておく（下段の漢字表記は、省略したり、複数ある場合は一つだけを記したりすることもある。小書きの注記等は多くは省略する。所在箇所も省く）。「いざなふ」、「によふ　呻」、「とはうをうしなふ　失途方」、「ともなふ」「ともなひ」、「ぬふ　縫」、「かみあらふ　沐」、「かよふ」、「かけしらふ　抱」、「かこふ　圍」、「かふ　飼」「かひ　同」、「かばふ」、「よふ　醉」、「たゝかふ　戦」「たゝかひ　同」、「ためらふ」「ためらひ」、「たゞよふ」、「そこなふ　残」「そこなひて　同」、「つどふ　集」「つどひ　同」、「つかふ　使」、「つくろふ」「つくろひ」、「つくのふ　償　贖」、「つがふつがひ　雙」、「つかふ　操」、「つくばう　蹲踞」、「つちかふ」、「ねらふ　認　覘」、「ねぎらふ　労」、「ならふ　習」、「うるほふ」「うるほひ」、「うつろふ」「うつろひ」、「うたふ　謡　諷」、「のたまふ」「のたまひて」、「くちすふ　措吮　吻吮」、「くらふ　喰」、「くるふ　狂」、「やしなふ」「やしなひ」、「やとふ」「やとひ」、「まがふ　紛　繽」「まがひ　同」、「まじなふ　禁咒　獣術」、「まよふ」、「まどふ」、「まとふ　纏」「まとひ　同」、「ふるふ　振　揮」「ふるひて同」、「こひねがふ」、「あらふ　洗　浣」「あらひ　同」、「あつかふ」「あつかひ」、「あてがふ　擬　ー作」「あてがひ　同」、「きらふ　嫌」「きらひ　同」、「めしつかふ　召仕」、「したふ　慕」「したひ同」、「ゑもんつくろふ　衣紋繕」、「ひろふ」「ひろひて」、「ひきしらふ　挽擺」「ひきしろひ　同」、「ひきつくろふ　引繕」、「すくふひ　救」、「すくふひ　済」、「すまふ　強」、「すりちかう　嗟咤」などである。これらは全て、上段では、先に示した「ともなう」「と

もない」のように、「う」「い」の表記で掲げられ、その「う」「い」に丸印が付されている。また、同じく示した「うるおう」「まごう」のように、「う」以外の仮名にも丸印が付されることもある（「うるおい」の「い」には丸印が無いが、他の動詞は基本的には「う」の左の「い」にも付される）。この「う」「い」以外の丸印は、この「潤ウ」のほかは、殆どは「紛ウ」の例のようにオ段長音の開合に関わるものである。なお、項目によっては丸印の無い場合もあるが、右に列挙した動詞の中では、「つくろい」と「ふるう粉ヲ」（この語がある九四丁は一丁すべてに丸印が全く無い）がこれに相当する。また、終止形の「う」には何も付けず、他の仮名に丸印を付けるが、中段では「ふ」に訂正されているという語もあった。「はりあふ」、「はからふ　評」、「たがふ　違」、「なにしおふ　名負」であり、上段では、「う」の所ではなく、「う」の上のそれぞれ「お」「ろ」「ご」「あ」に丸印が付いている。

逆に、連用形やその名詞化したものを先に掲出し左に（1例のみ下に）終止形を並べるものも挙げておく。「めまひ　眩暈」、「わづらひ　煩」「わづらふ　同」、「はらひ　拂　掃」「はらふ　同」、「にぎはひ　賑」「にぎはふ　同」、「つたひ　つたふ流水ニ流也」、「うしなひ」「うしなふ」、「まかなひ　賂」「まかなふ　同」、「「まひ　舞」「まふ　同」、「けすらひ　擬」「けすらふ　同」、「ふるまひ　振舞」「ふるまふ　同」、「てならひ　手習」「てならふ　同」、「あぢはひ　味　味飯」「あぢはふ　同　教」、「あらそひ　諍」「あらそふ　同」、「あらがひ　争諍」「あらがふ　同」、「あきなひ」「あきなふ」、「したがひ　同」「したがふ　同」（「したかひ」の）右に「したがへて随」がある）などである。

以上のほかに、連用形が名詞化したもの及びその複合語等の類であることが漢字表記から分かるものがある。これらは動詞終止形と並べられてはいないので、その点からは動詞との関わりが明示されているわけではないが、下段の漢字表記などから、動詞との関わりがすぐに理解・連想できるものである。ハ行の仮名で示されているものを、地名・苗字・謡曲名なども含めて示しておく。「いりあひ　晩鐘」（一五ウ。五ウにも「いりあひ　晩鐘」がある）、「ぬひ　縫殿」、「いぬかひ　犬飼」、「いかひ　猪飼」、「ふるひ　篩」、「御ふてゆひ　御筆結」、「かよひ小町　通ーー」、「うかひ　鵜飼」、「ぬひものや　縫物屋」、「ちかひ　誓」「よゐまどひ　宵惑」、「むしはらひ　蟲拂」、「むしくひ　虫喰」、「うりかひ　売買」、「まじらひ　参　交」、「こゝろづかひ　心遣」、「ておひ　手負」、「てつだひ　手傳」、「てづかひ　手遣」、「てつがひ　手番」、「きつかひ　気遣」、「ひとたがひ　人違」、「ものくるひ　癲狂　物狂」、「すゝはらひ　煤払」などである。

関連する他の語等から、また常識的に、動詞との関連が明らかであったと見られる語も、皆ハ行の仮名で示されている。「いぬかひ　ぼし　牽牛」（すぐ右に示したように「犬飼」がある）、その隣の「よばひぼし　流星」、「むしくひば　蛙牙」（「虫喰」あり）、「くらおほひ　鞍帔」、「にほひふくろ　幃　褘」（後の方に「にほふ」「にほひ」が並ぶ）、「もとゆひ　髻」（「御筆結」等あり）、「におひむま

駄」、「はづくろひ　刷毛」、「ぬひつゞり　穀甲ヲ書経」、「そらめづかひ　望視」、「ふなよそひ　艤」などである。なお、「くらお、い」、「にをひぶくろ」、「にぎわい」「にぎおう」はこのように丸印が二つ付いている。また、印の無いものとして、「番」の「つかふ」(これは上段も「ふ」で、誤りか)、「けすらう」(九四丁で一丁すべて無い)、「す、はらい」があった。

以上のように、かなり多くの動詞の連用形と終止形を繰り返して掲げ、殆どは上段の「い」「う」を誤りとして丸印を付し、中段で「ひ」「ふ」を正しいとしている(順に見ていくとくどいほどの示し様であるが、序文に「凡仮名を知人の其誤なからんためなれば名付て初心仮名遣といふ」と述べるような意識の反映であろうか)。当時の他の仮名遣書と同様に、ハ行四段動詞はハ行の仮名を用いるという主張がはっきり示されている。

三

前節に多くの語を示した通り、ハ行四段動詞の活用語尾(及び連用形が名詞化したものの語末)については、上段の「い」「う」を繰り返し「ひ」「ふ」に訂正しているのであるが、それにもかかわらず、中段の正しい仮名遣いが、ハ行の仮名でないものや、ハ行以外の仮名も認めているものが見られる。

まず、ハ行以外の仮名も認めるものについて見ると、次の語の場合に、「ひ」「ふ」以外の仮名も用いるとしている。

やらう人ニ物ヲ　やらふ共ニ用　追　逐同　(九十一ウ)

まじなう。　まじなふ共ニ用　禁咒　獣術　(九二ウ)

すまいて　すまひて　角觝二人ーー　(一〇七オ)

すまいとる　すまひ　相撲　捔力日本紀　(一〇七ウ)

すまう。　すまふうトモ　同　(同)

すう。　すふ　吸　(一〇七ウ)

すいて　すひていトモ　同　(同)

このように、ヤラウ・マジナウは「やらふ」「まじなふ」も「やらう」「まじなう」も共に用い、スマウは連用形とその名詞化したものは「すまひ」だが名詞スマウは「う」でも書き、スウは終止形は「すふ」だが連用形は「すい(て)」でもよいということになっている。

『仮名文字遣』慶長板本[6]においては、マジナウは、「い」に「ましない給ふ」、「ひ」に「ましなひて」、「う」に「ましなひたまう」が見られ、スマウは、「ひ」に「すまひて」と「すまひ(すまふ共、すまう共)」、「う」に「すまうのせちゑ　相撲節会」が見られ、スウは「い」に「すいて　吸」が見られる。これを見ると、ヤラウ以外は、『仮名文字遣』を取り入れたために「い」「う」も許容することになったと見ることができる。特に、『初心仮名遣』で、連用形「すまひて」と名詞化「すまひ」は「ひ」のみであるのに、名詞「すまふ」のみ「ふ」のほか「う」も認めているのは、『仮名文字遣』をそのまま受け入れた結果であることが分かる。また、「まじなふ」「まじなう」と

「すまふ」「すまう」の場合は『仮名文字遣』に「ましなひ」「ましない」と「すまふ」「すまう」の両表記が掲出されているが、「吸ウ」の場合は「すいて」のみ見られる。この語の場合は、「すいて」を誤りとして上段に記し、中段で「すひて」と訂正しながらも、「いトモ」として「すいて」を認めている。『仮名文字遣』から離れられない本書の性格が窺える。「同抄誤之分」のところで『一歩』を引用し、「おいて」「すいて」を「是誤也」とし、「すひすへすふと通故ひの仮名也」（一一〇オ・ウ）と記しているにもかかわらず、中心部分では『仮名文字遣』を取り入れ、結局は『一歩』が誤りとする表記も認めてしまっている。

ヤラウについては、『仮名文字遣』慶長板本においては「ふ」に「やらふ　擯　追」のみ見られ、「う」があるわけではないので、他の3語とは異なる。このヤラウは、『仮名文字遣』においては、漢字表記から分かるように、追い払う・しりぞける等の意の動詞である。『初心仮名遣』も、下段の漢字表記からは同じ意味の語であると見られるが、上段の小書きの説明に「人ニ物ヲ」とあるのが気になる。すなわち、（漢字表記からすれば追い払うのヤラウとも解していたのであろうが）ヤルに助動詞ウの付いたヤロウも含まれるとしていた可能性がある。助動詞ウは、当時「ふ」で書かれることも多かったが「う」で書かれることもあった。この点が「共に用」に関係しているかもしれない。

次に、ハ行以外の仮名のみが示されているものについて見る。終止形を「う」とするものが、1例であるが見られる。

いひそこなふ。　いひそこなう　失声　（六十五オ）

このように、上段で「ふ」に丸印を付け、中段で「う」に訂正するというもので、理解し難いが、後で見るハ行下二段動詞にも、右の例の次の丁に同様のものがやはり1例ある。

命ながらふ。　命ながらう　存命　（六十六オ）

これらが『仮名文字遣』において「う」で示されているわけでもない。ソコナウは、慶長板本では「ふ」に「そこなふ」とある。「ひ」のところにも「そこなひて」がある。またナガラウは、「へ」に「なからへ　長久」がある。ところで『初心仮名遣』では、少し後に、

ながらゑ。　ながらへ　長久　存命　（八十五ウ）
ながらうる。　ながらふる　同　（同）

という二つが並んでおり、先程の「う」の方はナガラウ、こちらの「ふ」の方はナガラウルと、元の終止形・連体形という掲出語形の違いはあるが、下段の「存命」は共通にある。本書には、前節に示した「さまよふ」のように該当しない箇所に丸印を付すという誤り等が散見するので、これらも誤りの可能性が高いと考えたいところだが、ナガラウにはもう1例次のものがある

いのちながらゑ。　いのちながらえ　命存　（六四ウ）

ナガラウは、「ふ」「へ」のほかに「う」「え」も用いる語であると考えていたようである。

「う」「ふ」ではない別の仮名に丸印の付された語で、上段・中段ともに「う」と書かれているものも3例ある。

のらう　　のろう　　咒咀　　(八十九オ)
やすろう　　やすらう　　徘徊　　(九十一オ)
やせおとろう　　やせをとろう　　羸　痩　　(九十一ウ)

これらについては、丸印を付した部分以外は注意が劣りがちになるということが考えられる。他の非常に多くの語ではそのようなことはないのではあるが、右にも述べたように、誤りや見落としの少なくない文献ではあり、これらは訂正し忘れの可能性が高いかとは思われる(断定はできないが)。

また、「ゐ」を正しいとするものが2例見られる。

いおう　　いはふ　　祝　　(六四オ)
いわひ　　いわゐ　　同　　(同)

すまい　　すまゐ　　捂居二人ーー住居(百六ウ)
すまう　　すまふ　　同　　(百七オ)

どちらも終止形は「ふ」が正しいとしているが、隣に並ぶ連用形名詞化は「ゐ」を正しいとしている。

このうち、スマイについては、「二人ーー」と出典を示しているが、『仮名文字遣』慶長板本には「すまひゐィ　栖居」とある。「ゐ」も「イ」として認めてはいるが、「ひ」のところに掲出されている語であり、まず示されている仮名は「ひ」ではある。ただ、この語が「すまゐ」と書かれることは多かったようで、実態に合わせて「ひ」は捨てられたと考えられる。これは、漢字表記が「〜居」となることが仮名遣いに影響していると見られる。『初心仮名遣』において、漢字表記「〜居」のものは、次のように全て「ゐ」を正しいとしている。

どい　　どゐ　　土居　　(三オ)
ながいのうら　　ながゐのうら　　長居浦　同(右に摂ーがある)　(十一ウ)
とりい　　とりゐ　　鳥居　　(十四ウ)
るすい　　るすゐ　　留守居　　(七十一ウ)
なみいる座ニ　　なみゐる　　並居　　(八十五ウ)
いながら　　ゐながら　　坐　乍居　　(八十八ウ)
まとい輪ニ居ル也　　まとゐ　　圓居　　(九十三オ)

一方、「居ル」を含む語であっても、漢字表記に「居」がないと、次のように「い」も認めるものになっている。

むれいる　　むれゐる用トモニ　　群集　　(八十六ウ)

漢字と仮名遣いの結びつきの強さは、次のような説明が随所に記されることからも分かる。

文字に此井を書はいづれも此ゐをかく也(一三オ)

この類の説明は、他の仮名遣書にもしばしば見られるものである。

イワイについては、『仮名文字遣』慶長板本では「ひ」に「いはひ共は　祝栄　栄神」とあり、「い」の「いはふ　祝いとはもひ」、「は」の「いはふ　祝　祟」とともにハ行の仮名であるが、「位牌」との区別のために「ゐ」の表記を主張する仮名遣書のあることが知られている。(7) 実は右に示した『初心仮名遣』の引用では省いてあるが、「いわゐ」の下の「同」に続けて、小書きで「此かな実はいはひな

れ共亡者の位牌にまかふゆへ女子是を忌て如此書来也」（六四オ）という説明があり、『初心仮名遣』の「いわゐ」も「位牌」との混同を避けるための表記であることが分かる。ここも『仮名文字遣』よりも当時の考え方を優先させた箇所となる。

四

ハ行四段動詞連用形が名詞化したものは、第二節に挙げたもの以外にもあるが、隣に元の動詞が並べられるか、漢字表記が元の動詞と共通かのどちらでもない場合、動詞との関連が意識されていたかどうか分からない場合がある。常識的に関連が意識されたであろうと容易に推測できそうな語については既に第二節で示しておいたが、これまで示した以外の語末イ音の名詞も、一応見ておくことにしたい。

まず語末「ひ」の語を挙げる。

さかい。	さかひ	境　堺同	（三ウ）
やよい。	やよひ	弥生	（四ウ）
おとゝい。	おとゝひ	一昨日	（五オ）
かい。	かひ	甲斐	（八オ）
うすい。	うすひ	碓氷　上ー	（十一ウ）
めまい。	めまひ	眩暈	（三五オ）
めしい。	めしひ	瞽	（三十五ウ）
みゝしい。	みゝしひ	聾	（同）
よわい。	よはひ	齢	（七十九オ）
たとい。	たとひ	假令	（八十一オ）
たぐい。	たぐひ	類	（八十一ウ）
そこい。	そこひ	底居　底井	（八十三ウ）
うかいする	うがひ	漱　鵜飼	（八十七ウ）
やまあい。	やまあひ	山隘	（九十二オ）
あたいカイ物ノ	あたひ	價　直	（同）
もとい。	もとひ	基二人ーー	（百五ウ）

これらを敢えて次の四つに分けて考えてみる。

第一は、ハ行動詞連用形の名詞化であることが明らかな語で、恐らくその意識から「ひ」が選択されたと考えられるもの。「さかひ」「めまひ」「めしひ」「たぐひ」「うがひ」「あたひ」がこれに当たる。当時まだ動詞が使われていたもの、一般的には廃れていたもの両方あるだろうが、動詞との関連が意識されていた面があると考えられる。またウガイは漢字表記として「漱」と「鵜飼」が並ぶが、どちらの意味の場合もあるということであろうし、後者は漢字からすぐに動詞との関連が分かるものではある。

第二に、ハ行動詞との関連は明確ではない語だが、関連する語として意識されていたと考えられるもので、「やよひ」「みゝしひ」「たとひ」がこれに当たる。「みゝしひ」は「めしひ」「まうもく盲目」の次に示されている。また「たとひ」は「たとへ　譬　喩」の次に示されている。このことから、「めしひ」「たとへ」との関連が意識されていたことが窺える。「やよひ」は漢字表記の「生」から、「おひ」との関連が意識されやすいと見られよう。

第三に、「ひ」が、ヒという語または漢字音に相当するものまたは相当すると意識されていたもので、「おとゝひ」「かひ」「うすひ」がこれに当たる。これは「ひ」で書くと考えるのが当然であろう。

第四は、右三つ以外の「よはひ」「そこひ」「やまあひ」「もとひ」で、このうち「やまあひ」は、掲出箇所や漢字表記からはどの程度意識されていたか不明だが、「合」や「あひだ　間」(九九ウ)との関連が当然予想されよう。「そこひ」と「もとひ」については何とも言い難い。「そこひ」は漢字表記に「居」も見られるが、先に示した幾つかの語とは異なり「ひ」である。『仮名文字遣』慶長板本を見ると、ヨワイ・モトイは「ひ」に「よはひ　齢」「もとひ　基」とあって合致するが、ソコイは「ゐ」に「そこゐ　底井」とあり合致しない。ヤマアイは記載がない(「山のかひ」はあるが)。

右の第一・第二の語について『仮名文字遣』慶長板本を見ておくと、「ひ」に「さかひ　境　堺」「うかひする　漱」「あたひ　価直」「やよひ　弥生　三月　姑洗」「みゝしひ　聾」「たとひ　仮令縦　仮使」「かひなし　無甲斐」とあり、また「ひ」に「たくひて類　比　彙」、「ふ」に「たくふ」、「へ」に「たくへ」などがある。殆ど合致すると言えるが、メシイは「ひ」に「めしひめしゐ　盲」、「ゐ」に「めしゐ」があって、「ゐ」も用いるとなっている。この「ゐ」を『初心仮名遣』では許容としていない点に活用語尾は「ひ」という意識を見て良いか。(以上のほかに、「ひ」「い」ともに認めている語として、「ひたい　ひたひ　是は何れも用ゆ　額」(二一ウ)、「やなくい　やなくひい共吉」(三六ウ)、「ことい牛　ことひとも用　特牛」(六〇ウ)(上段に〇なし)、「こよい。　こよひゐ共ニ用　今宵　今夜」(九十六オ)(ヨイには「よひ。　よい　宵」(五オ)と「まつよい。　まつよひ　待宵」(九三オ)と、やはり「い」「ひ」両方が掲出される)があるが、今回はひとまず検討を措き、名詞の「い・ひ・ゐ」については改めて検討することにしたい。)

次に、語末が「い」の仮名で示されている和語の名詞も見ておく。(なお、以下のほかに、「い」「ゐ」両方を認める「ほかひ。　ほかいゐ共　行器」(三七オ)がある。)

いざよひの月　いざよいの月　不知夜月不知歴月十六夜月(五オ)
かこひ。　かこい　拵(五ウ)
こまひ。　こまい　椙(七オ)
やらひ。　やらい　行馬　槎柘同(七オ)
めひ。　めい　姪(一八ウ)
をとがひ。　おとがい　頤(二一オ)
むながひ。　むなかい　胸懸(三六ウ)
こうかひ　かうがい　締枝　笄同(三九ウ)
をゝひ。　おゝい　覆(三九ウ)
たらひ。　たらい　盥艦(四〇オ)
ろかひ。舩　ろかい　櫓櫂(四〇ウ)
ぬひ。　ぬい　絎(四二ウ)
てのこひ。　てのごい　手拭(四三ウ)
染てのこひ。　てのこい　手拭(六三オ)

これらも、敢えて次の四つに分けて考えてみる。

第一に、動詞とは関係ないかまたは関連は不明の語で、関連が意識されなかったと考えられるもの。「こまい」「めい」「おとがい」「たらい」がこれに当たる。『仮名文字遣』慶長板本では、「ひ」に「めひ　姪」「たらひ　（略）　盥」、「い」に「こまい　相」、「お」に「おとかい　頤」がある。「めい」「たらい」は『仮名文字遣』とは異なる表記を採用しており、『初心仮名遣』の独自の部分である。

第二に、ハ行動詞の連用形が名詞化してできた語またはその可能性が高い語であるが、関連が意識されなかったかと思われるもの。「かこい」「やらい」「てのごい」がこれに当たる。『仮名文字遣』慶長板本に、これらは記載が無いが、動詞カコウ・ノゴウはあり、「かこふ」「のこふ」とハ行の仮名である。動詞カコウは、『初心仮名遣』でも、前節に挙げたように、七九丁ウに「かこふ　圍」と「ふ」で示されている。しかし「かこい」は漢字表記が異なっている。更に「かこい」は動詞「かこふ」の隣に掲出されておらず、離れた箇所にある。名詞化し、更に意味が限定されて城砦の意となり、元の動詞の意味が希薄になると、動詞との関連が意識されなくなるかと予想される。「てのごい」のノゴイは当然動詞ノゴウの連用形が名詞化したものであるが、前節に示したとおり『初心仮名遣』では七一丁ウに「ぬぐふ　拭」が見られるものの「のごふ」は見られない。このことから、動詞はヌグウが一般的になっていて、動詞ノゴウは廃れつつあったと考えられる。しかしテノゴイとしては残っていて、このノゴイと動詞ノゴウとの関連が分かりにくくなっていた可能性はある。漢字表記が「ぬぐふ」と共通なので、そのようなことはないと見られなくもないが。ヤライは「遣らふ」との関連は必ずしも明確とは言えないようであるし、漢字表記も全く異なっているので関連は意識されていなかったか。あるいは、これらは、動詞とはある程度関連があるが、「ひ」のものほどは無いと考えたと見ることもできるか。

第三は、ハ行動詞との関連が当然意識されてよいと思われるのに「い」になってしまっているもの。「いざよい（の月）」「おゝい」「ぬい」がこれに当たる。ただし「いざよい」は右の第二に入れてよいのかもしれない。漢字表記に動詞と関連づける要素が無く、また第二節にも挙げた一ウの「いざよふなみ」は動詞だから「ふ」で書く、一方こちらは違うから「い」となっていると見られなくもないからである。『仮名文字遣』慶長板本においては、「い」のところにも「ひ」のところにも「いさよひの月」があってどちらも「ひ」で示されている。またオオイも「を」に「をほひ　蓋　覆」、「ひ」に「をほひ」があり、やはり「ひ」である。ヌイは無いが、動詞ヌウは当然「ふ」に「ぬふ　縫」がある。「おゝい」「ぬい」は、『初心仮名遣』の他の箇所では、やはり第二節に挙げたように、「くらおほひ　鞍帔」（三七オ）、「ぬひ　縫殿」等があった。『仮名文字遣』とも異なる「い」を採用する理由は不明とするしかないが、動詞との区別が意図された可能性もあり、本書の特徴とも言えようか。

第四は、カ行動連用形が名詞化してイ音便化した語で、その関連が意識されたかと見られるもの。「かうがい」「むなかい」「ろかい」がこれに当たる。『仮名文字遣』には記載がない。『一歩』はカ行イ

音便について「きくいしう」の「通ひ」を主張している。

語末イに「ゐ」が示されているものにも一応触れておく。まず漢字「井」で書かれる場合は「ゐ」となる。「くもい。　くもゐ　雲井」(一オ)、「山のい。　山のゐ井同　山井玉井」(三オ)、「さめがい。　さめかゐ　醒井　近ー」(一二オ)、「たるい。　たるゐ　垂井　濃ー」(一二ウ)、「ゆい。　ゆゐ　由井　駿州」(一三オ)(この左に「文字に此井を書はいづれも此ゐをかく也」と記す)、「いぬい。　いぬゐ　犬井」(二四オ)、「たまのい。　たまのゐ　玉井」(五十四オ)、「あすかひ。　あすかゐ　飛鳥井」(廿五ウ)(この左に「上にても下にても井といふは皆ゐ也」と記す)などである(これは語頭・語中でも同じで、「いづゝや　ゐつゝや　井筒屋」(六十二オ)、「いげた　ゐげた　井桁」(四ウ)、「みいてら　みゐてら　三井寺」(五十四オ)、「きみいてら　きみゐてら　紀三井寺」(廿八オ)、「ふじいてら　ふぢゐてら　葛井寺　(廿八オ)」など)。また、漢字「居」の場合も同様であり既に示したとおりである。これら以外は、「いぬい　いぬゐ　乾」(一オ)(上段に○なし)、「くれない。　くれなゐ　紅緋」(一六ウ)、「くい。　くゐ　杭」(四十オ)、「くわい。　くはゐ　烏芋」(四五ウ)、「しい。　しゐ　椎」(四七ウ)、「くまのい。　くまのゐ　熊膽」(四八ウ)、「にいあたらしき也　にゐ　新」(六八ウ)、「なましい。　なましゐ　愁」(八五ウ)、「いひ。　いゐ　飯」(四一オ)、「くゞひ。　くゞゐ　鵠」(同)である。見てすぐ分かるように、「なまじゐ」以外は、動詞との関連が意識されない語ばかりである。「なまじゐ」との関連が予想される動詞シイルも、「しいる　しゐる　強」(一〇四オ)とあって「ゐ」である。これらについては、語頭・語中の「ゐ」とも合わせて別の機会に改めて検討することにするが、『仮名文字遣』慶長板本を簡単に見ておくと、「い」にも「ゐ」にも「いぬゐ　乾」があり、「ゐ」に「にゐまくら　新枕」、「くれなゐ　紅」、「くまのゐ　熊胃」があって合致する(クワイ・イイ・クグイは記載がない)。クイは「い」にあるが「くいくゐ　杭」であって「ゐ」も認め、ナマジイは「ひ」に「なましひ」、「い」に「なましい」、「ゐ」に「なましゐ」と三つの仮名全てを認める。これらも「ゐ」を選択し、「ゐ」のみに限定している点が『初心仮名遣』の特徴と言えようか。(なお、二つの仮名を認める語として「むしくひ。　むしくゐい　鴛」(五七ウ)があった。他の同様の語と合わせて、改めて検討したい。)

以上、おおまかに見て、ハ行動詞との関連が窺われるものは「ひ」、関連のないものは「ゐ」、その中間とも言えるものが「い」という傾向があるように思われるが、名詞の仮名遣いについては別の機会に検討したい。ただ、活用語尾と「ひ」の関連は見てよいと思われる。

五

続いて、これも比較的数の多いハ行下二段動詞を見る。こちらは、ハ行四段とは違って、終止形を先に挙げて次に連用形を並べる、または終止形(または連体形と合一化した形)のみを示すという場合は少なく、連用形(その名詞化)を先に挙げて終止形(または連体

形と合一化した形）等を並べる、または連用形のみを示すという場合が多い。

物をいろゑてと云ふは　いろへ也　綺　（一六ウ）

となう口に　となふ　號　称　（六九ウ）
となゑる　となへる　同　（同）

とゝのう　とゝのふ　整　調　（七〇オ）
とゝのおる　とゝのほる　同　（同）
とゝのゑる　とゝのへる　とゝのゆる同　（同）

かんかうる　かんがふるかんかへるとも　考　勘同　（七九オ）

かまゑて　かまへて　構　（七九オ）
かまう　かまふ　同　（同）

よこたゑ　よこたへ　横　（八〇ウ）
よこたう　よこたふ　同　（八一オ）（〇なし）

たくわゑ　たくはへ　貯　（八一ウ）

たゝゑ酒水　たゝへ　湛　（八一ウ）
たとう　たゝふ　同　（同）

たずさゑ　たづさへ　携　（八二オ）

そでうちはゑて　そでうちはへて　振同　（八二ウ）

そなゑ　そなへ　饍　備　（八三オ）
そなう　そなふ　同　（同）
そなわる　そなはる　同　（八三ウ）

つたゑ　つたへ　傳　兼同日本紀　（八四オ）
つたわる　つたはる　同　（同）
つとうる　つたふる　同　（同）

うれゑ　うれへ　憂　愁　（八六ウ）
うれうる　うれふる　同　（同）

うつたゑる　うつたへる　訴　（八八オ）
うつたうる　うつたふる　同　（同）

こたゑる　こたへる　答　對　（九六オ）
ことうる　こたふる　同　訓　酬　（同）

あゑて詞　あへて　敢　（九八ウ）
あゑてナマスナトヲ　あへてあふるトモ　韲　醤　（同）

あゑずいひもあへずなど　あへず　不堪　不敢　（同）
あつらゑ　あつらへ　誂　（九八ウ）
あつらう　あつらふ　同　（同）
あたゑる　あたへる　与　（九九オ）
あたうる　あたふる　同　（同）
さらゑ　さらへ　櫂　（一〇〇ウ）
こまざらい　さらひ　木間櫂　四歯把和名　（同）（〇なし）
さらうる　さらふる　同　（同）（〇なし）
さすらゑ　さすらへ　伶俜　流離同日本紀　（一〇一オ）
さすらふ　さすらふ　同　左遷　（同）（〇なし）
ひかゑる　ひかへ　引　（一〇五オ）
ひかう　ひかふ　同　（同）

このように、多くは上段の「う」「ゑ」に丸印を付け、中段では「ふ」「へ」に訂正しているが、丸印は時に四つ仮名（「たずさゑ」）・オ段長音開合（「たとう」、「ことうる」）・長音（「とゝのほる」）に関わる部分にだけ、またはそちらと「う」と両方（「つとう」）に付されている場合もある。また丸印の付けられていないものもある（「よこたう」、「こまざらい」「さらうる」、「さすらふ」）。四段動詞と違って、連用形が先に示される、または連用形だけという場合が多いのは、終止形だと下二段動詞であることが分かりにくいからであろう。実際、右に挙げたなかでも、「整ふ」「さすらふ」などは四段活用動詞もある。また話し言葉での終止形（元の連体形）を掲げている場合が多いことも、本来の終止形では分かりにくかったことの表れと言えよう。

右に挙げた以外の語を、名詞化したものの複合等を含め示すと、「あへしほ　和」、「いろへ　唯　諾同　返答同」、「とりあへす　不取敢」、「わきまへ　辨」、「かへ　改　轉」、「かそへてかすへてとも　数」、「よそへ　准」、「たへしのぶ　堪忍」、「たとへ　譬　喩」「むかへ　迎」、「さゝへる　支」、「しなへる　颯纚」、「ひるがへる　飄　飜」などが挙げられる。

ところで、以上のハ行下二段動詞の上段には、中段の正しい「へ」に相当する箇所に、全て「ゑ」が書かれ、そこに丸印が付けられている。上段は、最初に引用したように「日比誤来れる書ざま」と述べている表記のはずである。しかし当時、動詞語尾をこのように常に「ゑ」で書く誤りが多かったとは考えにくい。当時の本において、活用語尾を「ゑ」で書くことは極めて少ない。殆どは「へ」で書かれるが、時々「え」も用いられる。もちろん、出版された本の場合は、規範的な修正が多かれ少なかれ行われる機会があると見られ、初学者の書くものとは別だとは言える。しかし、活用語尾に時々用いられる方の「え」で書く誤りが全く無くて、「ゑ」ばかりで間違

うとは考えにくい。このハ行下二段動詞の上段を見ると、「日比誤来れる書ざま」という記述をそのまま信じることにためらいを感じる。また考えてみれば、掲げられている全ての語の仮名遣い誤用例を探して載せるなどということは到底無理である。ハ行動詞「へ」の誤用は全て「ゑ」にしておくというような形式的な処理が行われることは当然予想できる。上段の表記を見て、当時はこのように誤ることが多かったというような判断は簡単にはできないと思われる。

このハ行下二段動詞の場合も、ハ行四段動詞と同様に、ハ行以外の仮名をも認めているものや、ハ行以外の仮名のみを示すもの（そのうちの「う」1例と「え」1例は既に第三節において示したとおりであり、ここに再び示すことは省く）が少し見られる。ハ行以外の仮名も用いるとしているのは次の語である。

あゑもの　　あへもの　　韲　醤（あへるの時ハえ也）（四一ウ）
はゑ（色のはあふ也）へ　　はへはえ共　　映　（ゆふはへ夕栄）（六六ウ）
のりかゑ　　のりがへえ共　　乗替　（八九オ）

このうち、「はへ」「はえ」については、『仮名文字遣』慶長板本において、「へ」に「はへ　栄絶　光見」、「え」に「はえなし　無見」とあるのを反映したものかとも見られるが、「あへもの」「あえる」については慶長板本の「へ」に「あへもの　韲」「なますをあへて韲」とあり、「のりがへ」「のりがえ」については記載がない（動詞カウの「かへ」は、「へ」に「かへ」がある）ので、「あえる」「のりがえ」の根拠は不明である。ハ行以外の仮名が示されるものとしては次の語がある。

そへる　　そえる　　添　（八二ウ）
そう　　そふ　　同　（同）

これが「え」になっている理由も不明。『仮名文字遣』慶長板本は「ふ」に「そふ　添　副　傍」、「へ」に「そへて（そひて共）　添　副　備進」があり、「ひ」にも「そひて（そへて　とも）　添　備　副」があるがハ行の仮名のみである。もう1例、「ゑ」を正しいとする異例なものがあるが、

こしらへ　　こしらゑ　誘二人ーー拵　調薬　刷馬（九六ウ）

これは「誘」に「二人ーー」と記されていることからも明らかなように、『仮名文字遣』慶長板本にも「ゑ」に「こしらゑて」とあるのに拠ったものである。ただし、コシラエには「え」を正しいとする項目もある。

こしらゑくすり　こしらえ薬　拵薬　（六三オ）

こちらでは、「ゑ」を誤りとしている。いずれにしても、コシラウはハ行の動詞ではないと考えていたことが窺える。今回調べた限りでは、ハ行四段の例外は『仮名文字遣』の説を取り入れた部分が大きかったのに比べ、ハ行下二段の例外では必ずしも多くはないという違いが（理由は分からないが）あると言える。

六

以上の二種類以外の活用の動詞はあまり多くないので簡単に見ておく。

ア行下二段動詞は、

こゝろゑて　　こゝろえて　　心得　　(九六オ)

という項目が見られる。この動詞は、作品などで「こゝろへ」と書かれることも少なくないようであるが、この『初心仮名遣』は、古用どおりの仮名遣いになっている。『仮名文字遣』慶長板本も「え」に「こゝろえて　心得　意獲得」とあり、これに拠ったとも考えられる。なお、単独の「得」も、

ゑる人ヨリ物ヲ　える　　得　　(九七オ)

とあって「え」を正しいとしている。

ハ行上二段動詞については、前節に示したように「しゐる」(シフ)があったのと、第四節で見たように名詞化した「めしひ」(メシフ)があった。『仮名文字遣』慶長板本では、メシイは「ひ」のほかに「ゐ」もあったこと、既に見た通りであり、シイテは「ゐ」に「しゐておる　強折」がある。「しゐ」は『仮名文字遣』どおりだが、メシヒは「ひ」のみにしている。『一歩』はオフ(生)を「おひ」「おふる」とし、「ひふの二字」に「かよふ詞」とする。

ヤ行上二段動詞には次の2語が見られる。

むくい　　むくひ　　報　　(八六ウ)
むくう　　むくふ　　同　　(同)
くい　物思也　　くひ　　悔々　　(八九ウ)

このように、ハ行の仮名が示される。クユは『仮名文字遣』慶長板本にも見られ、「ひ」に「くひて　悔」とあってやはりハ行である。この点は『一歩』も同じで、本来のヤ行ではなく、「悔」に「くひ」「くふる」と記す。当時の考え方が『初心仮名遣』にも反映していると言える。

ヤ行下二段動詞は、次のように基本的には「え」を正しいとして示す。江戸時代初期の本で動詞語尾エがハ行動詞とヤ行動詞とで概ね書き分けられていたことをこれまでにも報告してきたが、『初心仮名遣』においても同様であることが確かめられる。

にへゆ　　にえゆ　　熱湯　　(三二一オ)
そびゑて　　そびえて　　聳　　(八三ウ)
まみへる　　まみえる共ニ用　見　視　覬　　(九三ウ)
こゞへ寒　　こゞえこゞゆる　寒　冰二人丸秘　(九六オ)
こへて山川又物ニスクル、ヲモ　こえて　越　超　(九六ウ)
こへる　　こえる　　同　　(同)
きゑる霜雪火　　きえる　　消　　(一〇二オ)
めみゑ　　めみえ　　目見　　(一〇二ウ)
みへる　　みえる　　見　　(一〇三オ)
ひへる冬　　ひえる　　冷　冱　　(一〇五オ)

しかし、「え」以外の仮名を認める場合がある。

いゑぐすり　　いえくすり　　愈薬　　(四八ウ)
こへる身　　こえるゑ共　　肥満二人丸ー渡ノ同土　(九六ウ)

この2語も、後者に「二人丸ー」とあることからも理由は明らかで、『仮名文字遣』慶長板本において、「へ」に「いへくすり　愈薬」、「え」に「こえたるこゑたりとも　肥満」と「こえたり　渡土也」、

「ゑ」に「こゑたり　肥」となっているのを取り入れた結果である。ここにもまた『仮名文字遣』の影響の大きさが窺えるが、漢字表記はそのまま受入ながらも、大書きの仮名は変更するなどしてどちらも「え」にしている点に、『初心仮名遣』の独自性を見ることができる。また、「え」でない仮名のみ示しているのは、

もゑぎ　　もへぎ　　萌黄　細同　　（一六ウ）

の1例で、これは『仮名文字遣』慶長板本の「え」の「もえき　萌黄」とは異なっている。結局、多くは「え」としてハ行動詞とは書き分けているものの、『一歩』のように「え」に徹することはできていない。『一歩』の主張する「ゆえと通ふ」という点も出てこない。「たくわゆる　たくはゆる　たくはふ」（八二オ）（下段が漢字表記でないという点ではかなり異例の項目である）という項目があるのを見ると、「ゆ」といってもハ行の仮名になる語の存在が意識されていたとも考えられる。『一歩』はこの点を、「ゆる」というものでも「ふ」に通えば「へ」で、「ゆ」「え」と通い「ふる」とはいわないものは「え」という規則で見事に解決しているが、しかしやや分かりにくい規則であったとも見られよう。

ワ行上一段動詞も2語見られ、ヒキイルは「ひきゐる　領日本紀　将同　帥同　率同」（一〇五オ）と「ゐ」であるが、モチイルは、

もちいる　　もちゐる　　用　庸同　　（一〇五ウ）
もちいて　　もちひて　　同　　（一〇六オ）
もちひらるゝ　　もちいらるゝ　　被用　　（同）

と「い」「ひ」「ゐ」全ての仮名が示される。これは『仮名文字遣』慶長板本も同じで、「ゐ」に「もちゐる　用　庸」、「ひ」に「もちひて　用　庸」、「い」に「もちいらるゝ　被用」となっている。見てすぐ分かるように、ここは『仮名文字遣』をそのまま取り入れている。『一歩』は「もちゐる　用」と「ゐ」を示しながらも「奥のひにても書歟」と記している。「い」は認めていないものの、一つの仮名に定められておらず、モチイルは仮名遣いがゆれていた語のようである。

ワ行下二段動詞は、次の2語が見られる。

うゑき　　うへき　　樹木　　（四七オ）
うゑる草木　　うへる　　栽　　（八七ウ）

すゑて　　すへてゑモト　　居鷹馬置日本紀　礎イシスヘ　扣馬　　（一〇七オ）

このワ行下二段は、『一歩』も、「うへ」「うふる」、「すへ」とハ行の仮名を正しいとしていて、当時の板本も概ねそうなっている。『仮名文字遣』慶長板本も「へ」の「うへをく　栽植」「すへて　居扣」「むまをすへて　馬居」「うへたり　飢」など「へ」が多いが、「ゑ」にも「すゑて　馬ヲスエ留也」があり、これを『初心仮名遣』では「ゑトモ」として取り入れていることが窺える。ここにも、これまでと同様、『仮名文字遣』を入れることによって、統一的な仮名遣でなくなってしまったという傾向を見ることができる。

七

最後に、カ行四段動詞連用形のイ音便と、形容詞語尾イの表記について見ておく。なお、サ行イ音便、ハ行ウ音便、バ・マ行ウ音便、形容詞のウ音便などの用例は無かった。

カ行四段イ音便（ガ行の例は無かった）及びそれに由来するものの例として、次の語が見られる。

おゐて　をいてひ共　於　（七一ノ又一オ）
ないて　なひて　泣鳴啼　（八五ウ）
物をすひて　すいて　数寄　（一〇六ウ）
田をすひて　すいて　犂田　耨同　（一〇七ウ）
紙をすひて　すいて　漉紙　（同）
見ゑすひて　みえすいて　見透　（同）

このように、4例が「い」、1例が「ひ」、1例は「い」「ひ」ともに認めるというものである。『一歩』は、「きくいしうの内きくいの三字にかよふ詞」として「い」を主張し、これを引く『初心仮名遣』「同抄誤之分」においても、「キ　ク　イの三字に通ふ也然故にい也」のように「キクイ」を片仮名に変えて注意をする。それにもかかわらず、泣イテは、『一歩』が誤りであると指摘する『仮名文字遣』慶長板本の「ひ」の「なひて　泣」と同じく、「ひ」を正しいとしてしまっている。また於イテも、慶長板本において、「を」の「をいて」と、「ひ」の「をひて」があるのを取り入れた結果、「ひ共」となったのであろう。ただこちらは「なひて」とは異なり「い」も見られる。

形容詞（及び名詞化したもの）の語尾イも、同様に「い」と「ひ」が見られる。

うすい色　うすひ色　薄色　（一六ウ）
おさない　おさなひあひトモ　稚　（一八オ）
いさぎよい　いさぎよひ　潔浄　（六六オ）
ぬるい　ぬるひ　暖湯水　（七一ウ）
ぬくとひ　ぬくとい　暖気　（七一ウ）
おしろい　をしろい　白粉　（六三オ）
ほしひまゝ　ほしいまゝ　縦逸　自恣　（六八ウ）
またひ人　またい人　全人　（九三オ）
こひ色　こい色　濃色　（一六ウ）
こひ色　こい　濃　（九六オ）
あやしひ　あやしい　異　奇　（一〇〇オ）

これらのうち、『仮名文字遣』慶長板本には、「いさきよひ　潔」のみが「ひ」にある（「い」に「いさきよし　潔浄」もあり）。この語はこれに従った可能性があるが、他の語の書き分けの基準は全く分からない。名詞化したものも「おさなひ」と「おしろい」と両方にあるので、その点も関係なさそうである。「うすひ」と「こい」の違いも見出しがたい。(8)

なお、助動詞マイが1例見られるので挙げておく。

やるまい　やるまひ　遣間敷　（九一ウ）

『一歩』は「まい」が正しいとしている。

八

今回、『初心仮名遣』の活用語尾（及び動詞連用形の名詞化した語の語尾相当箇所）の仮名遣いを見たところ、多くの動詞が、例えばハ行の仮名で示される等、規則的な面は窺えた。しかし一部に他の行の仮名を許容する場合が少数だが必ずあり、その多くは『仮名文字遣』の記述を取り入れたものであった。特に、ハ行四段の「すいて（吸）」や、カ行四段イ音便の「ないて（泣）」、形容詞の「～ひ」など、『一歩』が誤りとして鋭く指摘した、いわば『一歩』の批判の対象の中心的存在であるような語や部分でさえ、『仮名文字遣』に従ったり、主張を取り入れ許容の仮名としたりしている。『仮名文字遣』の影響力の強さを見ることができる。この例がなければ統一的な仮名遣いになるはずだがと感じる例外の殆どは、『仮名文字遣』の記述を反映させたものであった。『仮名文字遣』における不統一の部分（例えばハ行四段動詞の多くはハ行の仮名で示されるのに、そうでない例外のもの）、『一歩』が誤りとして指摘[9]している例の語や正しい例として示している語（誤りの例として挙げる語の場合は、「誤」と記し、下に正しいと主張する仮名を記しておく）、『初心仮名遣』の例外的な部分などについて、まとめると次のようになる。（上の漢字表記は便宜的なもので、仮名遣書の字とは異なる場合もある。『初心仮名遣』の欄の○×等は、『仮名文字遣』との一致・不一致で、特に『仮名文字遣』と全く同じ場合は◎とした。また、記述は適宜簡略化し、平仮名の「とも」等を見やすくするため片仮名「トモ」等に変えるなどの変更を加えてある。）

	仮名文字遣	一歩	初心仮名遣
負	おいて	誤　ひ	（×ておひ　におひむま）
吸	すいて	誤　ひ	○ ×う　ふ　共ニ用
損	そこなふ そこなひて		×いひそこなう
呪	ましない給ふ		○ ×ひ　いトモ
壅	あへもの あへて		○あへもの ×あへるの時はえ
拵	こしらゑて		○こしらゑ ×こしらえ葉
随	したかえて	誤　へ	×したかへて △二人ーニハシタカヘテトアリ如何
添	そへて		×そえる
長	ながらへ		○ながらへ・ながらふる ×命ながらう
替	かへ		○ ×のりがへ　え共

栄	はへ		○はへ　はえ共 ×はへ
癒	いへくすり　えトモ		◎いえくすり　へトモ
肥	こえたる　ゑトモ こえたり こゑたり		◎こえる　ゑ共
萌黄	もえぎ		×もへぎ
用	もちゐる もちひて もちいらるゝ	もちゐる ひモ	◎もちゐる もちひて もちいらるゝ
据	すへて すゑて	すへ	◎すへて　ゑトモ
解	とひて	誤い	
泣	なひて	誤い	◎なひて
潔	いさきよひ	誤い	◎いさぎよひ
無悪	さかなひ	誤い	
妬	ねたいかな　ひトモ		

このように、せっかく『一歩』を「益アル書」として取り上げたのに、『仮名文字遣』に従う部分が多かった事が分かるが、『初心仮名遣』独自の部分（一般的とは思えない仮名遣いであるが）もあることも確かではある。『一歩』は、『仮名文字遣』の活用語尾の仮名遣いの不統一をよく見出して訂正しているが、この書が真っ先に誤りとして掲げた「したがえて」については、「へ」を正しいものとして中段に示してはいるものの、その項目の漢字表記の下に、「二人ーニハシタガエト　アリ如何」（一〇三ウ）と記す。ここはさすがに許容の仮名にはしていないが、「如何」とするにとどまり『仮名文字遣』が誤りであるとは明言していない。やはり『仮名文字遣』を尊重する傾向が分かる。

このように、規則性や単純化への志向が見られるものの、『仮名文字遣』に従うことにより、中途半端なものになっている。統一的かと見られる部分もあれば、形容詞イ語尾のように「ひ」「い」が拮抗するというような理解し難い部分もあるという点も、種々の要素が混在していることを窺わせる。当時の考え方を伝えるという点では、興味の尽きない文献であるが、活用語尾の仮名遣いを中心とした今回の検討から、簡明なものを目指しつつも旧説を尊重して複雑になってしまうという面のある点を見ることができた。

注1　特に、末尾の「△五音之図」の前にある、「△ふをむに読事」の部分は注目すべき記述として知られており、酒井（一九八四・五）に詳しく紹介されている。また、坂梨（一九八〇）（一九八六）（一九九一）などにおいて仮名遣いの実態の研究に本書が利用されてきた。本書の字音語の仮名遣いに関しては、安田（一九九四）において興味深い考察が行われている。近年は狩野（二〇〇八）（二〇〇九）のような本書を主な対象とする研究も行われるようになった。狩野（二〇〇七・〇九）は本書の検索に便利であり、最初の解説も要を得たものである。ただ、『国語学研究事典』を、詳細な解説があるとして紹介するが、その項目（『日本語学研究事典』も参考文献以外は全く同じ）には、適切とは考えられない記述

が見られ（『人丸秘抄』に関し、同じ語に二通りの仮名遣いを認めるあり方を非難している」とあるが、「二人丸秘抄両用仮名之分」のところに非難の記述は見当たらない。続く「同抄誤之分」は二通りの仮名遣いという点を誤りとする部分ではない。また、ここで『人丸秘抄』とし、最後も「『人丸秘抄』との関係はさらに吟味の余地がある」とするが、本書では常に「二人丸秘抄」「二人丸秘ー」「二人丸ー」「二人ーー」となっていることからも、また『仮名文字遣』を「二人丸秘抄」とする誤りについては夙に指摘されている通り、ここは『人丸秘抄』ではなく『仮名文字遣』とすべきである、参照する際には注意が必要かと思われる。なお、本稿で『初心仮名遣』を引用する際、漢字は新字体や通行の字体に直して示すが、各語の下段の漢字表記等、旧字体等のままで示すこともある。また、合字等も適宜変えて示す。

2　例えば最近でも久保田（二〇一三）において、『好色一代女』の「家」13例全てが「いゑ」であることを報告した。今野（一九九六）には「いゑ」を掲げる仮名遣書の詳しい紹介もある。

3　この部分にも「え」を「もとえ」と呼ぶという興味深い記述があることなどが遠藤（二〇〇七）に紹介されている。

4　この誤りについては、「是元来ノ作ニハアラジ後人加筆ノ誤リ或展轉書寫ノ誤トミルベシ」（二一〇オ）と述べるが、これも『一歩』の下巻の序文に見られる「石流布の本を定家の仮名遣と世間にいへ共定家卿の所作にはあらす大形に書集て置給ひし仮名遣に又後人書添てあまれし故あやまり有之といへり」とよく似た記述である。同様の記述が『類字仮名遣』（寛文六年刊）の序文にも見られることが、安田（一九九四）にも指摘されている。

5　活用語尾を中心に見るため直接は関わらないということもあるが、本書における四つ仮名とオ段長音の開合の実態については狩野（二〇〇八）（二〇〇九）で報告されているということもある。

6　『仮名文字遣』慶長板本は、駒沢大学国語研究資料第二『仮名文字遣』（汲古書院）によった。同書所収の文明十一年本や、陽明叢書国書篇『中世国語資料』所収の文禄四年本、古辞書研究資料叢刊第一一巻（大空社）所収の天正六年本等も参照したが、慶長板本にのみ該当語が掲出されている場合も少なくないなどの点から、板本との比較のみで十分と判断した。諸本における違いについては改めて考えることにしたい。なお、引用する際、下の漢字表記は適宜省略することがある。

7　島田（一九六六）にもこれに関する指摘がある。

8　安田（一九九四）が字音語の「う」「ふ」に関して「解し難い」と述べる部分があるように、本書には根拠不明の仮名遣いも散見する。

9　『一歩』が指摘する、『仮名文字遣』の活用語尾の仮名遣いの誤りについては、久保田（二〇一一）において検討した。その際、「用ゐる」について、『仮名文字遣』の記述の脱落があったので、今回のものに訂正しておきたい。なお、『一歩』は、『仮名文字遣』が「ゑ」とする誤りについては言及していない。

参考文献

遠藤邦基（二〇〇七）「ちぢみ「え」――仮名の異名といろは歌――」（『国語文字史の研究』十、和泉書院、『国語表記史と解釈音韻論』（和泉書院）所収）

狩野理津子（二〇〇七・二〇〇九）「『初心仮名遣』索引（上）（下）」（『同』十、十一）

狩野理津子（二〇〇八）「『初心仮名遣』の四つ仮名」（『国文学』（関西大学）九二）

狩野理津子（二〇〇九）「『初心仮名遣』の開合――アウ型・オウ型動詞を対象に――」（『国文学』（関西大学）九三）

久保田篤（二〇一一）「『一歩』下巻の仮名遣い説について」（『成蹊国文』第四四号）

久保田篤（二〇一三）「貞享期西鶴本の仮名遣い――『諸艶大鑑』と『好色一代女』の場合――」（『近代語研究　第十七集』武蔵野書院）

今野真二（一九九六）「かなづかいの転換期――近衛家陽明文庫蔵本『土左日記』を中心資料として――」（『国語国文』第六五巻第三号、『仮名表記論攷』（清文堂）所収）

酒井憲二（一九八四・一九八五）「中近世における一種の仮名遣について（上・中・下）」（『語文』（日本大学）六〇・六一・六二、『甲陽軍鑑大成第四巻　研究篇』（勉誠出版）所収）
坂梨隆三（一九八〇）「曽根崎心中の「い・ひ・ゐ」について」（『近代語研究　第六集』武蔵野書院、『近世の語彙表記』（武蔵野書院）所収）
坂梨隆三（一九八六）「曽根崎心中の「え・へ・ゑ」」（『松村明教授古稀記念　国語研究論集』明治書院、同右所収）
坂梨隆三（一九九一）「曽根崎心中の「お・ほ・を」」（『人文科学科紀要』（東京大学教養学部）第九四輯、同右所収）
島田勇雄（一九六六）「連歌師のかなづかい書」（『甲南大学文学会論集』第三二号、『西鶴本の基礎的研究（明治書院）所収』
安田章（一九九四）「平仮名文透視」（『国語国文』第六三巻第九号、『国語史の中世』（三省堂）所収）

（くぼた・あつし　本学教授）